

2024年3月 文京区立森鷗外記念館編集・発行(年4回発行)



文京区立 森鷗外記念館NEWS

No.46



慶應義塾大学部 文学科 卒業記念 1897年7月初旬撮影 前列右端・鷗外、中央・福澤諭吉

目次

卷頭コラム「類まれな長編作家としての加賀乙彦氏」沼野充義(東京大学名誉教授・スラヴ文学者)／コラム「加賀乙彦先生の没後一年に寄せて～軽井沢高原文庫での活動を通じて～」大藤敏行(軽井沢高原文庫館長)／展示報告／カフェ便り／展示のお知らせ 特別展「教壇に立った鷗外先生」／展示会場から／活動報告／これからの催しもの／主な寄贈図書一覧／2024年度前期開館カレンダー／編集後記

類まれな長編作家としての加賀乙彦氏

沼野充義（東京大学名誉教授・スラヴ文學者）

加賀乙彦氏が亡くなつたのは二〇一三年の一月のことだつたから、もう一年以上の時が過ぎた。しかし、その死によつて日本文学にぽつかり穴が空いてしまつたという感覚は弱まるどころか、いつそう大きなものとして迫つてくる。それは、加賀氏が単に日本を代表する小説家の一人であるだけではなく、文壇に類を見ない長編作家として大きな存在感を發揮していたからではないかと思う。

加賀氏はかねがね「長編好き」を自任し、『私の好きな長編小説』（新潮選書）という、長編小説の名作の勧所を押さえて解説した評論集を書いているほどだが、そこでこんなことを言つている――「優れた長編小説とは、大森林のようです。複雑で奥深く、さまざまな情景が展開し、美しい花園や不思議な洞窟を見、高鳴る風音やひそやかな地底の声を聞き、数知れぬ生き物に出会う世界です」。

「長編好き」は加賀氏の場合、読む場合だけではなく、書く場合の選択でもあつた。じつは加賀氏は最初の頃は短編小説もかなり書いていたが（『加賀乙彦短篇小説全集』全五巻、潮出版社、一九八四—一九八五年、にまとめられている）、本領を発揮したのはなんといつても長編小説——しかも相当に長い——のジャンルにおいてだった。現在、作品社から『加賀乙彦長編小説全集』が刊行されており、二〇一四年十一月に全十八巻で完結する予定になつてゐる。これを見れば、デビュー作『フランドルの冬』から晩年の大河小説『永遠の都』『雲の都』の二部作に至るまでの威容が明らかである。この『長編小説全集』の刊行がスタートした折、私は出版社に求められてパンフレットに次のような推薦の言葉を書いた（自分の書いたものを引用するのもおこがましいが、私にとつてこれ以上のことは言えないという、ぎりぎりの考え方を書いたものなので、あえて引用させていただく）。

日本の近現代小説史の中で、加賀乙彦はひとり屹立する存在である。若き日に西欧近代小説を耽読した加賀乙彦は、やがて世界文学の大作家たちに張り合えるような長篇を自

ら書くという野心的な挑戦に乗り出していく。その結果、伝統を踏まえながらも先鋭的であるというほとんど不可能とも思えることを実現し、長篇小説というジャンルが二十世紀後半になつてもいまだに秘めていた波みづくせない魅力の世界を、圧倒的な筆力をもつて繰り広げた。『宣告』『永遠の都』のような代表作は次々とロシア語に訳され、加賀乙彦はいまロシア文学という大森林の中で、ドストエフスキイ、トルストイと並び立つ作家になつてゐる。加賀乙彦が書いてきたのは、現代において書かれる最も小説らしい小説の数々である。彼の著作集は小説の勝利を示すものに他ならない。

実際、加賀氏の「日本人ばなれ」した、構えの大きな豊穣な長編小説は、戦後間もない頃、現実生活における飢えを癒やすかのようすにむさぼり読んだヨーロッパの長編小説の読書体験に支えられたものだつた。当時加賀氏はバルザック、スタンダールなどのフランス文学にも熱中したようだが、とりわけトルストイとドストエフスキイという、大長編得意とする二人のロシア作家の影響を強く受けた。現代日本で稀に見る西歐的な骨太の構造を持つ本格的長編を書く加賀乙彦氏の作家としての基礎には、こういつたロシア文学があつたことは忘れてはならない。実際、『宣告』を読めば誰しもドストエフスキイの『死の家の記録』を連想するだろうし、『永遠の都』およびその続編である『雲の都』のような大河小説はトルストイの『戦争と平和』という前例なしには想像することが難しい。

晩年の加賀氏は自分の小説がロシア語に翻訳されることを切望されていたが、それもおそらく、自分の愛するロシア文学の本国で自分の作品が、トルストイやドストエフスキイと共にどのように受け止められるか知りたいと思つたからではないだろうか。私は加賀氏の依頼を受け、ロシア語訳出版のコーディネーターを務め、『宣告』と『永遠の都』のロシア語訳出版のお手伝いをし、どちらも無事にサンクトペテルブル



2013年、モスクワの赤の広場で。加賀氏は右側。左は筆者。

加賀乙彦先生の没後一年に寄せて

大藤敏行

（軽井沢高原文庫館長）

二〇一三年一月十二日、作家の加賀乙彦先生が老衰のため、お亡くなりになりました。九十三歳でした。

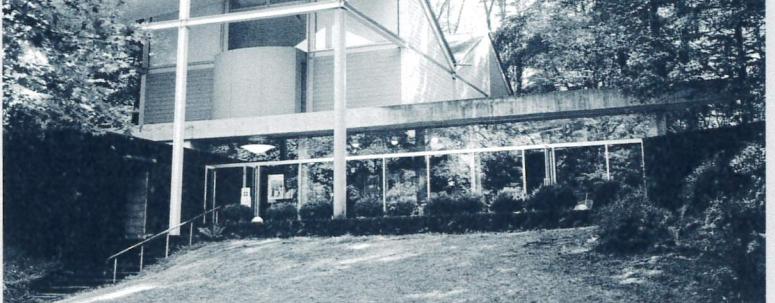
加賀先生には、一九八八年からお亡くなりになるまでの二十五年間、軽井沢高原文庫館長として、館の発展にご尽力いたしました。

私は、先生が館長就任当時から、副館長の立場で、展覧会の企画やイベントの講師選定など、文学館の様々な事業に関して、先生にずっとご相談してきました。

ここでは、軽井沢高原文庫での活動を通じてのつながりなどを中心に、加賀先生に関する想いを記したいと思います。

いま、振り返ってみると、加賀先生に関する最も古い記憶は、一九八七年に「福永武彦展」を開催したときの情景です。『学生時代から夏は軽井沢に来ていて、その後たまたま福永武彦さんのお名前が挙がり、お話をなさり、強く印象に残りました。

その後、一九九四年、軽井沢高原文庫の理事を増やすという話が出たとき、中村真一郎先生から



軽井沢高原文庫外観

加賀乙彦、辻邦生両先生のお名前が挙がり、お二人にお願いすることになりました。

増やすという話が出たとき、中村真一郎先生から

「高原文庫の会」で来賓の挨拶をされたときの情景です。「学生時代から夏は軽井沢に来ていて、その後たまたま福永武彦さんのお名前が挙がり、お話をなさり、強く印象に残りました。

その後、一九九四年、軽井沢高原文庫の理事を増やすという話が出たとき、中村真一郎先生から

「高原文庫の会」で来賓の挨拶をされたときの情景です。「学生時代から夏は軽井沢に来ていて、その後たまたま福永武彦さん

展示報告

「近所のアトリエ——動坂の画家・長原孝太郎と鷗外」

2024年1月19日(金)～4月7日(日)

コレクション展
坂の画家・長原孝太郎と鷗外期間中、モリキネカフエでは期間限定メニュー「近所のアップルパイ」を販売します。鷗外の次女・杏奴、三男・類は長原孝太郎に絵を学び、エッセイに長原の思い出を綴っています。

杏奴のエッセイ「追憶から追憶へ」には、「画材にされたらしい林檎や梨、夏蜜柑などが青磁の皿に盛られた儘置かれてゐて、熟しきりの果実のかぐはしい匂ひが辺りに漂つてゐた」とあります。今回は、团子坂沿いにある近所のベーカリー「パル」に画材にされたらしい「食材のひとつである林檎のパイをお願いしました。温かいアップルパイに、冷たいバニラとショコレーのアイスクリームを添えた一皿をお召し上がり頂きました。

文京区内に長く暮らし、今年生誕160年を迎えた洋画家長原孝太郎(号・止水)は、鷗外主宰雑誌「めさまし草」裏表紙絵を手掛けたことを皮切りに鷗外著書の装丁なども手掛け、やがてそれぞれの家族も交流を持つようになりました。鷗外も長原も互いのことを多く語っていましたが、鷗外が小説『田楽豆腐』の中で「動坂にある長原と云ふ友達」と記していることから、長原と鷗外の親交を確信し本展を企画しました。

第一章「長原と鷗外の化学反応」と題して、長原が手掛けた「めさまし草」裏表紙絵(全34点)と鷗外著書の装丁などを並べ、鷗外の文業を支えた長原のカリカチュアやブックデザインを中心に、長原と鷗外を直接繋ぐ資料を展覧しました。第二章「長原と鷗外の周縁」では、美術界や雑誌・文芸書の中での共演、家族を交えた交流などを取りあげました。当館初公開となる文京区民寄贈の長原の油彩画作品《残菊》が二章の最後を飾りました。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご協力を賜りました関係者の皆さんに厚く御礼申しあげます。

「めさまし草」裏表紙絵に代表されるような唯一無二のカリカチュア、デザイン性の高い装丁、デッサン力が認められる挿絵や絵画作品を展示室に集めたことで、長原が多種多様な表現を駆使できる技量と器用さを兼ね備えた画家であることに気づかされました。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご協力を賜りました関係者の皆さんに厚く御礼申しあげます。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご協力を賜りました関係者の皆さんに厚く御礼申しあげます。



長原孝太郎の油彩画作品《残菊》(当館初公開)

○前号(記念館NEWS 45号)4頁「展示のお知らせ欄に、長原の装丁・口絵として鷗外の著作集『水沫集』縮刷版(春陽堂、大正5年)を掲載しましたが、その後の調査で、版元による当時の広告から、装丁は日本画家・斎藤松洲によるものと判明しました。



第二章「長原と鷗外の周縁」

第一章「長原と鷗外の化学反応」

第二章「長原と鷗外の周縁」

第一章「長原と鷗外の化学反応」

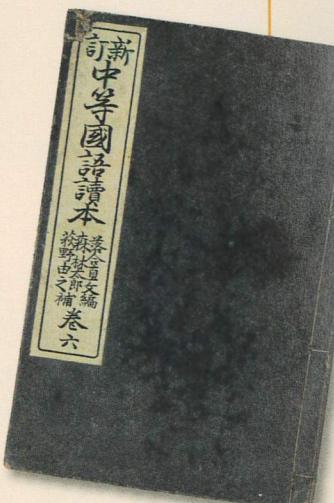


春の特別展「教壇に立った鷗外先生」期間中も特別メニューを販売予定です。どうぞお楽しみに!

展示のお知らせ

特別展

「教壇に立った鷗外先生」



『新訂中等國語讀本』卷六
落合直文編、鷗外等補
明治書院 1909年1月新訂再版
歌人・落合直文編纂の教科書。
落合没後、鷗外は本書の改訂に關わっている。

講演会

「教壇に立つ 十教科書をつくる森鷗外」

森鷗外は学校で教え、小学生用から大人用まで多くの教科書を作った人でもあります。教育者としての鷗外に光を当てます。

講師 大塚美保氏(聖心女子大学教授)

日時 6月1日(土) 14時～15時30分

参加費 無料(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)

申込締切 5月20日(月) 必着

講師 布施英利氏

(東京藝術大学教授・美術解剖学)

日時 6月9日(日) 14時～15時30分

参加費 無料(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)

申込締切 5月20日(月) 必着

展示解説

「森鷗外と美術解剖学」

ドイツ留学を終えた森鷗外が、明治23年、東京美術学校の校長・岡倉天心から依頼を受けた「美術解剖学」の講義とはどのようなものだったのかをお話しします。

講師 布施英利氏

(東京藝術大学教授・美術解剖学)

日時 6月9日(日) 14時～15時30分

参加費 無料(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)

申込締切 5月20日(月) 必着

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。

5月1日、5月29日、6月19日

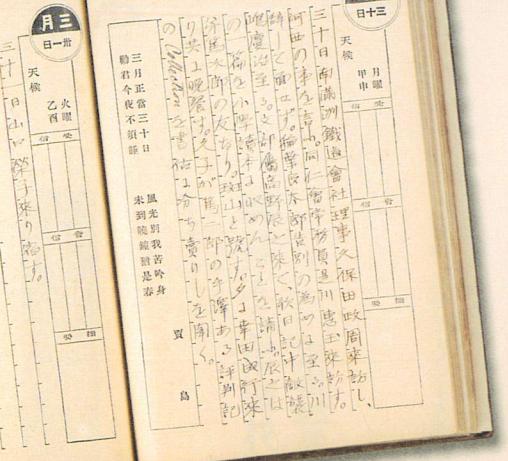
いずれも水曜日 14時～(30分程度)

申込不要(当日の展示観覧券が必要です)

ネルにて配信予定。



『鷗外日記』1908年3月30日
小学読本の教科書に、『うたの日記』所収の詩「敵襲」の掲載許諾を求められたことが記されている。



岡倉天心自筆『雪泥痕』 公益財団法人日本美術院蔵
岡倉(東京美術学校長)の日記には、1890年12月に鷗外が登場する。

翌年、岡倉は鷗外に依頼した。



鷗外が美学の講義に使用した
哲学者ハルトマン『美の哲学』
を要約してまとめたもの。

文豪・森鷗外(1862～1922)は留学から帰国後、教壇に立ちました。1888(明治21)年、陸軍軍医学校の教官となり衛生学を教え、1893年から同校の校長となります。その間、東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)で1891年から美術解剖学を、1896年より美学と西洋美術史を講義します。1892年からは慶應義塾大学部で美学の嘱託講師も務めました。東京大学卒業の頃から文筆をはじめ、陸軍軍医としてドイツに留学し、欧州の文化に触れるなどの経験を重ねたからこそ、鷗外はこれらの科目を教えることが出来たのでしょう。講義は、1899(明治32)年に小倉への赴任により終了しますが、教員や学生との交流は続きました。

他方、鷗外は1908(明治41)から1920(大正9)年に修身や唱歌の国定教科書編纂にもかかわっていました。また、鷗外の作品は生前から現在まで、国語や現代文の教科書に掲載されています。教科書で鷗外の小説を初めて読んだ方も多いことでしょう。本展では、教育にたずさわった鷗外の姿を、講義を受けた学生のノートや関連資料、教科書などをとおして展示します。あなたと鷗外先生の接点が見つかることかもしれません。

唱歌の国定教科書編纂にもかかわっていませんでした。また、鷗外の作品は生前から現在まで、国語や現代文の教科書に掲載されています。教科書で鷗外の小説を初めて読んだ方も多いことでしょう。本展では、教育にたずさわった鷗外の姿を、講義を受けた学生のノートや関連資料、教科書などをとおして展示します。あなたと鷗外先生の接点が見つかることかもしれません。

鷗外の国定教科書編纂にもかかわっていました。また、鷗外の作品は生前から現在まで、国語や現代文の教科書に掲載されています。教科書で鷗外の小説を初めて読んだ方も多いことでしょう。本展では、教育にたずさわった鷗外の姿を、講義を受けた学生のノートや関連資料、教科書などをとおして展示します。あなたと鷗外先生の接点が見つかることかもしれません。

唱歌の国定教科書編纂にもかかわっていました。また、鷗外の作品は生前から現在まで、国語や現代文の教科書に掲載されています。教科書で鷗外の小説を初めて読んだ方も多いことでしょう。本展では、教育にたずさわった鷗外の姿を、講義を受けた学生のノートや関連資料、教科書などをとおして展示します。あなたと鷗外先生の接点が見つかることかもしれません。

鷗外の国定教科書編纂にもかかわっていました。また、鷗外の作品は生前から現在まで、国語や現代文の教科書に

展示会場から

岡倉天心筆鷗外宛書簡

明治24年2月16日付

[405031]

「拝啓 人骨モ大学より参り候二付」という一文から始まるこの書簡は、明治22年に開校したばかりの東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)の二代目校長・岡倉天心が、同校の美術解剖学講義の嘱託講師となる鷗外に宛て、講義の準備状況や日程を知らせるものです。人体の美術的表現を追求した解剖学である美術解剖学は、まだ日本では確立していない学問でした。医学の知識を持ち、ドイツ留学中に欧州の文学や美術など幅広く吸収した鷗外に白羽の矢が立つたとみられます。

冒頭の「人骨」は講義に必要だったためで申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧いただけます。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。

★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

申込みは○以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧いただけます。

「ベルリン森鷗外記念館や海外へエアメールを書こう!」◎

文の京ワークショップ/ふみの日イベント
「140年前のドイツ留学と森鷗外——自己探究と文学憧憬」

講師:林正子氏(岐阜大学名誉教授) 会場:講座室
定員:50名 料金:1000円
申込締切:6月28日(金)必着

140年前にドイツへ留学した鷗外。当時の日本とドイツの比較、また留学は鷗外に何をもたらしたかなど、お話をいただきます。

会場:エントランス 料金:無料
ドイツ・ベルリンの森鷗外記念館や海外のお友達へお手紙を送ってみませんか。

6月13日(土) 14:00~15:30

展示関連講演会「森鷗外と美術解剖学」

講師:布施英利氏(東京藝術大学教授・美術解剖学) 会場:講座室
定員:50名 料金:無料 ※要展示観覧券(半券可) 申込締切:5月20日(月)必着

6月15日(土) 10:30~12:30(予定)

文学散歩「これより図書館へゆかばや」

同行講師:倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場:本郷、上野周辺を予定
定員:15名 料金:1500円 申込締切:5月31日(金)必着

本郷から上野まで、鷗外、漱石、一葉の歩いた道、作品ゆかりの場所をたどります。

◇◆上記イベントの申込方法◆◇

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。

②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

【ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。】

左記の貴重な資料を文京区立森鷗外記念館にご寄贈いただき誠にありがとうございました。鷗外研究のための貴重な資料として、未永く保存・活用させていただきます。

【著者寄贈】 「三色旗」第846号 慶應義塾大学通信教育部編、慶應義塾大学出版会 2023年2月 ※橋口勝利著『近代日本の工業化と山辺丈夫「波汎榮』との邂逅と技術経営者』収録

「一冊の本」第28巻第1、4、7、10号 朝日新聞出版 2023年1月、4、7、10月 ※小堀鷗一郎著「人それぞれの老いと死」 訪問診察医がみた461人の生老病死 第12~15回回録

「山崎一穎著『森鷗外論』完結篇」2022年12月 ※伊藤一郎著「山岡浩一著『鷗外先生の食卓』家族が見た文豪の食生活 津和野町観光協会 2023年3月

坂田隆善著『翻訳「日本の米食に関する研究」谷口謙著「Voi'sの視点からみた日本軍の給養」森林太郎著「石川県大和路ならぬ」』第25巻第11号~12号、第26巻第1号~3号など

「文化交流大和路」2022年3月~2023年3月 ※沼倉延喜著「室博物館総長兼図書館員森林太郎(鷗外)と奈良一再考」第一回~第四回 最終回収録

「広瀬徹著『紛山仁三郎(梓日)伝 実業家と文芸』戯劇書房 2023年4月 木村勲著『鷗外を考える 幸徳事件と文豪の実像』論創社 2023年2月

「山崎一穎著『森鷗外論』完結篇」2022年12月

「太平餘興」第11集 太平社屋編刊 2022年12月 ※伊藤一郎著『慈仙旅日記』伊香保紀行篇補遺』収録

「松原伸太郎著『宮内官僚森林太郎第一回なぜ元号考』に取り組んだのか』収録

「日本近代文学第1~8集 2023年5月抜刷」(日本近代文学第1~6集は2022年11月、「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて)収録

「精選女性隨筆集 森茉莉 吉屋信子著『吉屋信子著、小池真理子選 文藝春秋』2023年10月(文藝春秋庫)※島内裕子著『解説(森茉莉)』ほか収録

「出口智之講演「テクノベイスの森 鷗外文庫の深奥から」記念講演会記録」東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会編 東京大学附属図書館 2022年12月

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アンデルセル作 森鷗外訳 常珠山房 2023年9月、10月 第一分冊は改版

「斯文会第138号 斯文会 2023年6月 ※水上雅晴著「論文 森鷗外『元秘別錄』との関係を中心に」収録

「天龍」の編集第1号 つづくと第6卷第1号 つづくと2023年5月「天龍」の画家・宮芳平・森鷗外没後百年に寄せて」収録

「春日井ひとこ校訂『声にしてよ』即興詩人総ビデオ』第一~第三四分冊 アン

2024年度前期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

4月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

5月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

6月						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

7月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

8月						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	(3)
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

9月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

コレクション展「近所のアトリエ——動坂の画家・長原孝太郎と鷗外」
1月19日(金)~4月7日(日)

特別展「教壇に立った鷗外先生」
4月13日(土)～6月30日(日)

コレクション展「鷗外の歴史小説」(仮称)
7月5日(金)~10月6日(日)

- 早朝開館(9時)
- 夜間開館(20時まで)

開館情報は予告なく変更になる場合があります。

本誌においては、7号(2014年6月)、20号(2017年9月)31・32合併号(2020年6月)に執筆頂き、13号(2015年12月)に山崎一穎氏との対談記事を掲載させて頂きました。バツクナンバーは、当館HPからご覧頂けます。



動坂の画家・長原孝太郎(と鷗外)の会期に合わせ、当館における加賀先生の活動や、愛読された鷗外作品を加賀先生の言葉と共に紹介しました。ここに改めて、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

令和5(2023)年1月12日
当館名誉館長の加賀乙彦先生がお亡くなりになりました。この度
加賀先生の一周年を迎えて、本号では
は加賀先生と親しく交際されていて
た沼野充義氏、加賀先生が館長を務められた軽井沢高原文庫の大藤
敏行氏にご寄稿いただきました。
また、当館の展示室1では、コレ
クション展「近所のアトリエ——

編集後記

●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
 - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
 - ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
 - ・JR線・京成線「日暮里」駅 西口 徒歩15分

交通案内

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「19特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分

※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511

URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00（最終入館は17:30）
休館日 毎月第4月・火曜日（祝日の場合は開館、例外あり）、

og
Rō
アト

文京区立 森鷗外記念館

印刷物番号 D0123052